

デカルトの「オリュンピカ」をめぐって

石 井 誠

1. 遺稿「オリュンピカ」

デカルトが一六五〇年スウェーデンで没後、未完の論考や断片的著述や覚え書き、書簡などが整理され、「ストックホルム遺稿目録」が作成された。それは全部で二十三項からなっていたが、そのなかのC項には、一冊の小さな羊皮紙の帳面にデカルトが若い頃に書いたと思われる著述や学問にかんする考察、代数などを含む無題の手記などがあった。

この「ストックホルム遺稿」は現在失われて存在しない。このC項の帳面をライプニッツが写し、あるいは一部を写させたが、そのコピーによりフレーシユ・ド・カレイユは一八五九年に「思索私記」と題して出版した。

「オリュンピカ」はその中に含まれているものであるが、「エクスペリメンタ」「パルナッスス」とともに一連の意図のもとに書かれた三部作の一つと推測されている。そして、この「オリュンピカ」の内容は超知的領域に係わるものであったと思われる。この「オリュンピカ」の遺稿には、「夢の話」も記載されていたと思われるが、いまは失われて存在しない。それはバイエの「デカルト氏の生涯」のなかに見られるものである。

デカルト全集第十巻にはフレーシユ・ド・カレイユによる「思索私記」が記載され、「オリュンピ

カ」と題してバイエの伝記から「夢の話」が収められている。

2. デカルトの夢とその解釈

バイエによると、「オリュンピカ」はその欄外に「一六一九年十一月十日、靈感に満たされて、驚くべき学問の基礎を発見した」という言葉で始まっていたといわれている。そして、「学問の基礎」を発見したのは夢に先立つ、数日以来続いていた熱狂の中においてであり、夢にはそのような精神状態が反映されていると思われる。

彼は一晚のうちに続いて三つの夢を見た。

第一の夢では、デカルトは街を歩いているとき、激しい風に押し流されて、自分が行こうとしていた学院の教会へ強いて連れていかれる。

第二の夢では、落雷の音と思われる鋭く激しい音を聞いたような気がして恐怖のあまり目が覚めると、無数の火花が部屋中に飛びかっているのを見た。

第三の夢では、彼は二冊の書を見た。一冊は辞書で、他の一冊は「詩人集成」という題名の詩集であった。そして詩集の中の「いかなる生の途に従うべきか」と「肯定と否定」とがデカルトに示された。

デカルトは眠りから覚める前からその解釈を試みているが、それによると、「辞書」はすべての学問の集成を、「詩人集成」は哲学と知恵の統一を意味し、「いかなる生の途に従うべきか」という詩は知恵にいたるための「賢者の訓え、もしくは道徳神学の教え」を表すと考えた。

デカルトはこれらの夢の解釈を目覚めてからも続け、「肯定と否定」という詩は、学問ないし人間

的知識における「真理と虚偽」を表すと考えた。そして怖れと怯えに伴われた第一と第二の夢は、自分の過去の生活への警告、第三の夢は、自分の未来に架けられた希望の予告と考えたデカルトは、「その翌日」いつの日かイタリアのロレートに詣でて、感謝と加護の祈りを捧げようと思った、とバイエは記している。

第一と第二の夢について、デカルトが自分の過去の生活への警告と考えたことについて、田中仁彦氏は「デカルトは彼のとどまるところを知らない知識欲に恐怖を感じ、真理を探究することに罪の意識を抱いていたのであり、その潜在意識がデカルトを深い恐怖と不安におとし入れたのであろう」と推測する。

また、第一の夢の中にN氏とメロンのことがでてくるが、メロンについてデカルトは、「純粹に人間的な関心から求められた孤独の魅惑」と考えた。これは当時としては奇想天外な解釈で、当時の常識からすればメロンは宇宙、天体、学問、などの象徴であったとされている。

第二の夢の激しい雷鳴をデカルトは、「真理の霊が降ってくる合図である」と解釈するが、これはデカルトが「良き霊」または「神の霊」をさすものとされている。そしてこの夢を「天から来たかと思われる」と確信したのは、第三の夢につづいて「こうした解釈がすべてうまくいったのを見て」、「すべての学問の宝庫を開いて見せてくれたのは真理の霊であったことを確信するにいった」ということである。

第三の夢については、デカルトの解釈にもとづいて所有章氏が述べているように、「『辞書』の象徴するような、雑多で不確実で無統一な旧来の学問に取って替って、『いかなる生の途に従うべきか』の詩句の象徴する、知恵と哲学との結合を、すなわち、生活の知恵へと結ばるべき、学問的真理の獲得を夢裡に告げられたと彼が思ったからであらう」と思われる。

3. 「夢」についての問題

デカルトの夢にみられる精緻さは、夢が作り話ではないかという疑いを持たれてきたが、この事について、グーイエはデカルトが目覚めた後に夢を再現したとき、夢にある論理とそれが恐らくは持っていないかった正確さを与えているとする。そして夢と解釈の過程を考える。すなわち、デカルトが第一と第二の夢について解釈するのは第三の夢を見た後であった。第一と第二の夢の間には二時間の経過があり、第二と第三の夢の間には目を覚ましたある時間があり、したがって彼は各々の夢の後にそれらを再現することが出来た。そして最後の夢にその意味を与え、それから前の二つの夢の意味を与える解釈をした、とする。そしてその結論として

1. 第三の夢から第一の夢を思い出すとき、それは実際に見た夢に近い。

2. 第二と第三の夢は目覚めた意識による夢からかなり離れた再現である。

3. 第三の夢の最後のエピソードは実際に見た夢に似た特性に一致する、と考える。

また、このころのデカルトはバラ十字会に大きな関心を持っていたとされているが、バラ十字会の研究者であるアルノールは二つの問題を提供する。

1. 夢はなかったが、夢の形で哲学的物語はあった。

2. 夢はバラ十字会の寓話のモデルにもとづいて、デカルトによって作られたものである。

グーイエはアルノールの提出した問題の重要性を肯定する。そして、「オリュンピカ」では感覚的でないことがらを、感覚的なことからしめす言葉で想起するというやりかたで語る、ということではバラ十字会との類似を認めただうで、デカルトの夢がフィクションではない証拠を示す。そして、「思索私記」の中の「エクスペリメンタ」に見られる断章を取り上げる。

「一六二〇年 驚くべき発明の基礎を理解しつつあった」

「一六一九年十一月の夢、その中で「いかなる生の途に従うべきか」に始まる

アウソニウスの詩第七歌

この「驚くべき発明の基礎を理解しつつあった」とおなじ言葉は「オリュンピカ」の欄外にも書かれており、そこでは一六二〇年十一月十一日となっているので、その日は夢のちょうど一年後にあたる。その日に記念すべき日を思い出しているということは、デカルトにとってこの夢が、いかに記念すべき事件であつたかを示すとともに、それは、フィクションではないことを明らかに示すものだというのである。

4. 驚くべき学問について

デカルトが「オリュンピカ」の始めの欄外に記入した、「靈感に満たされて驚くべき学問の基礎を発見した」ということばのしるされた、一六一九年十一月十日から十一日の夜にかけての記念すべき日のことは、十七年後に書かれた「方法序説」の第一部と第二部のつなぎのところに見られるといわれる。

すなわち、第一部の最後の部分の「ある日のこと、私自身にとっても本気になって考えよう、そして辿るべき道を選ぶために私の精神の全力をつくそう、と私は堅く決心したのである」。この文の「ある日」 *un jour* は「オリュンピカ」の十一月十日のことをさすことは研究者達の一致するところである。

つづいて、第二部の最初の部分の「そのころ私はドイツにいた。……おりしも冬の始めで、ある村里に滞在したのであった。……終日ただひとり炉部屋に閉じこもり、ゆっくり落ちついて、さまざまな思索に耽ったのであった」という文に見られる「冬の始め」はこの時のことを指すとされる。

このとき滞在した「ある村里」un quartier はドナウ河のほとりの「ノイブルク公爵領のなか」（バイエ）と言われている。

この第二部においては、夢の熱狂的な体験のことは書かれていないが、ここでは統一性のある学問はただ一人の手によってのみ築かれうること、そして、方法を提示しながら、数学以外のあらゆる学問にも有効に適用し、統一的学問がその方法のもとで樹立されなければならない、と考える機縁を得たことがのべられる。

「オリュンピカ」の「驚くべき学問の基礎」とは何かということについては「方法序説」や「オリュンピカ」等を中心に議論が重ねられて来たが、非常に難しい問題でもあり、そのいくつかを紹介するのにとどめたい。

まず、統一的な学問を中心とする考えとして、レーヴィスは「数学が核心にあり、自然の神秘は数学と同じ連鎖を持つならば、同一の鍵によって数学を起点として開示しうるものであり、すべての事物は数学と同じ仕方につながり、人が発見しえないほど隠されたものは何もないと思われるのであり、知の鍵は方法を構成する順序である。学問の統一性、方法、普遍数学は相互関係を持つものであり、真に根本的なものは、それらの相互関係を看取することが学問の基礎であり、その基礎を前にデカルトは感嘆する」とする。

また、森有正氏はとくに第一部の終わりの部分「私自身によっても本気になって考えようと決意し

た」という文に注目し、「この文は新しい自然科学の研究が確実な認識を与えてくれたのに対し、それをいかにして知恵と媒介すべきかを自己の内面において学べきことを意味している」とし、「自己において確実なものがまったくないかどうか吟味してみることが『驚くべき学問』の探究にあたる」と考える。そして「『驚くべき学問』とは、デカルトが一六一九年三月二十六日ベークマンに書き送った『まったく新しい学問』と殆ど同じものと思われるが、ただ自己において確実性の原理に媒介され、知恵へと必然的に結合されたものを意味し、その『基礎』とは、その認識が知恵となるための内的条件、方法が可能となる条件を意味する」とのべる。

これに対し、ミレー、アムラン等の解釈家たちは「驚くべき学問」の発展を「オリュンピカ」のうちに認めている。そのような考えとして、田中仁彦氏は、デカルトが夢の解釈をした方法が「驚くべき学問の基礎」ではなからうかと考える。そして、「『オリュンピカ』の断章の『想像力が物体を概念するのに図形を用いるように、知性は精神的なものを表象するのに風、光といったある種の可感的なものを用いる・・・』といった文例は霊を風によって表象するというアレゴリー的方法を、図形を用いる幾何学的方法に対比している」とし、「この可感的なものを図形に用いる幾何学的方法に対比するべき、非可感的なものをアレゴリーによって置き換える方法を発見したことによって、学問への新しい道が開かれたと考えたのではなからうか」とする。

5. 驚くべき発見の基礎

「一六一九年十一月十日、靈感に満たされて驚くべき学問の基礎を発見した」という「オリュンピカ」の一句の傍らの欄外の新しい余白に、新しいインキで、同じ著者の筆跡で「一六二〇年十一月十

一日驚くべき発見の基礎を理解し始めた」と書き入れられていた、とバイエは伝えている。

この「驚くべき発見の基礎」とは何を指すのかについても多くの議論が重ねられて来た。その有力な推定として上げられているものとして

1. リアールは「放物線を使って、あらゆる種類の三次あるいは四次方程式に帰せしめられる立体の問題を作図する法」の発見であるとする。

2. 望遠鏡の発明がそれである。すなわち、その基礎とは望遠鏡の数学的解明の手掛かりを掴んだのである(ミロー)といわれている。

とくに2.の説が有力であるが、このことについて、グーイエは「ミローの仮説である望遠鏡はすでに存在していたが、その基礎となる数学理論が残されていた。デカルトが一六二〇年十一月十一日に発見するのはこの『基礎』である」とする。

しかしこれらは推測の域に留まる。

6. 「オリュンピカ」の断章について

「オリュンピカ」は夢の話とライプニッツによりコピーされた断章からなる。断章の一つには一六二〇年二月二十三日とあり、バイエは「オリュンピカ」は、一六一九年と一六二〇年始めのものである、としている。

その八つの断章はデカルト全集第十巻の「思索私記」の中に収められているが、断章1b. と3. はバイエにより夢の話の中にとり入れられているので、内容的に重複していることになる。

断章1aは「想像力が物体的なものを構像するのに図形を使用する、知性は精神的なものを形象化

するのに風、光などのような感覚的物体を用いる。・・・」とあるが、これはおそらく夢に關して書かれたものと思われ、同時に断章の中心的な考えが示されている。それは、レーヴィスによれば、「精神的実在と感覚的実在との間の記号的、象徴的対応を決定しようとするもの」である。

この断章はバイエにより夢の話の中に取り入れられた断章1bと一つのものであったと考えられている。

断章1bでは「意味の重い文章は大部分、哲学者の書いたものよりは、詩人の書いたもののうちに見いだされるということは驚くべきことのように思われる。・・・・・・我々のうちには火打ち石におけるごとくに真理の種子がある。・・・・・・」

とあり、ここでは詩人は哲学者に並び立つのであり、夢の高揚した体験が反映していると思われる。この断章はバイエにより夢の話の中に挿入されたが、それは、「詩人の象徴主義を註解するために断章を滑り込ませ、その詩を介して知恵と哲学との結びつきを明らかにしている」(グーイエ)。

また、ここに見られる「真理の種子」という言葉はストア学派にその起源を持つが、それは「デカルトがその重要性を自分の思想のうちで絶えず強調することになる概念である」(レーヴィス)。

断章2 は大変みじかく、「智者達の言は、幾つかのごく僅かの一般的規則に要約されることができる」という文だけであるが、グーイエは「彼はいくつかの教訓にいたる一つの方法を自覚する」と述べる。

断章3 はロレットへの巡礼を約束するとともに、復活祭までに論文を出版することを誓っている。そして、一六二〇年二月二十三日の日付が認められる。

このロレットへの巡礼の文はバイエにより、夢の話の中に挿入されている。ロレットへの巡礼、論文の出版、日付の問題は少し後に検討したい。

断章4. グーイエによれば、デカルトはここで「精神に関する象徴的な考えをとり上げる。すなわち、愛、慈悲、調和である。デカルトは夢の解釈に用いた風と光の二つのシンボルをとり上げ、ほかの三つを付け加える。運動、熱、瞬間的な創造、そして、活動的な力が調和であることが重要である。すなわち、活動する力は愛であり、愛は熱によって形に表わされる・・・始めに寒さを吸収し、湿りを乾かす不均衡があるならば、これはあまりに早く生じるこの勝利を妨げるためである」。

断章5. デカルトは「神は光を闇から分かった（と創世記にあるが、）」ということは、良い天使を悪い天使から分かったということである。・・・ゆえにそれは文字通り理解されることは出来ない」と述べているが、これについてグーイエは、「聖書は形あるもののもとに精神的な意味を探しながら象徴として読まなければならない。闇は光の欠如にすぎない、すなわち、所有の欠如はこの所有物を所有していることから切り離し得ない。すなわち、形あるものは文字では理解しえない。それは、神は良い天使を悪い天使から分かったということである」と解釈する。

このころのデカルトはアウグスチヌスの「創造記注解」を知り、それにならって自らも宇宙の創成を象徴的に説こうとしていたと言われている。

断章6. は「神は三つの驚くことをされた。事物を無から創造された、自由意志、そして人―神」と短い文であるが、レーヴィスによれば、「創造者の全面的超越を含意する（無からの）創造を強調している。そして彼は自由意志は他の何ものにも還元出来ないことを強調する。それは人―神の神秘と共に驚嘆すべきものである」。

断章7. は「自然的事物に関する人間の認識は、ただ感覚に与えられているところのものへの相似による。・・・」となっているが、ここでは相似（類似）の重要性を強調している。

断章8. 「動物の或る行動の中に認める高度の完成は我々にそれ等が自由意志を持たないことを想

像させる」。これは文字通り理解出来る内容であるが、デカルトはここでも自由意志を強調する。そして、この「自由の概念が人と動物とを深く対立させる」（レーヴィス）。

これらの断章は、大変脈絡がなく、所謂感覚的、象徴主義的な印象を受けるが、レーヴィスは「これらの断章は数学的象徴主義とは根本的に異質な象徴主義になお浸透された、時代の精神風土を表している。デカルトは、恣意的記号とそれに合わせて順序づけられる実在との間の恒常的関係というものに執着するどころか、夢想状態での象徴や詩的イメージから出発し、内在的意味の豊かな、精神的なものと物体的なものとのあいだのより親密な関係や深い類似を示唆する」と述べるが、これはこの断章の特質を言い表している。

8. 二つの約束

バイエは夢の物語に続いて、デカルトが夢の翌日、彼が生涯の最も重要な事件と判断したこの事件を託するために聖母に願をかけたこと、そして、祝福された聖母の心を一層強く動かすために、ロレットのノートルダム寺院に巡礼しようと誓いを立てたことを記している。彼は十一月の前に出発したいと望んでいた。しかし、彼がまったく望んでいなかった理由のために、イタリアへの彼の旅は異なるものとならざるを得なかったと述べる。また、つづいてデカルトは、一六二〇年の復活祭の前に完成したいと願っていたであろう論文にとりかかり始めたこと、しかしながら、この論文が当時に中断され、そのとき以来、それが不完全なままであるという多くの痕跡があると述べている。

また、夢の話に取り入れられた断章3では、論文の出版を誓う文に続いて、一六二〇年二月二十三日という日付が認められる。そこで

1. デカルトはロレットのノートルダム寺院への巡礼を何時行う予定であったか。

2. デカルトは論文を何時出版の予定であったか。

ということが問題となる。このことについても見解の分かれるところであるが、グーイエは一六二〇年四月十九日の復活祭の前に論文を出版し、十一月末までにロレットへの巡礼を行う計画であったろうと考える。

論文については、方法序説第二部に「二、三ヶ月かけて検討するうちに、以前非常に難しいと判断していたかすかずの問題にけりをつけてしまいましたか・・・」とあるのは「数学の宝庫」Thesaurus mathematicus のことである。そして、デカルトが論文の完了と公刊を考えるのは、一六一九年十一月十日の三ヵ月後の一六二〇年二月二十三日であろう、とする。

田中仁彦氏は、方法序説第三部に「まだ冬も明けきらぬうちに旅に出た」とあるのは三月初旬か中旬頃であろう。二月二十三日は「姉部屋」からの旅立ちを前にして、デカルトがたてた旅の予定表である。そして、ノイブルクのデカルトは、四月の復活祭までに論文を仕上げて出版した後、ヴェネツィアに行き、冬の前にロレットに到達しようとする計画であったろう、とする。

論文については、この断章が「オリュンピカ」に含まれていることからすれば、そこに言う論文は「オリュンピカ」を指すのが最も自然であり、論文を出版した形跡はない、と考える。

これに対して、レーヴィスは断章³の読みが不確かであり、フレーシュ・ド・カレイユ版では九月二十三日となっており「ハルキエ篇仏訳版も九月二十三日」、バイエはロレット詣での誓いを一六一九年十一月と推定していることから、たぶん、断章の日付を二月と読んだのであろう。デカルトは再び旅に出る前に、一六二〇年四月の復活祭をめざして、その論文を仕上げようと気を配りながら、同じ年の十一月にロレット詣でを予定するのは不自然である。むしろありそうなのは九月である。記

念すべき十一月の体験の一周年記念を感謝のためにイタリアに赴こうとする。しかし、この旅行が彼に進行中の著作の執筆を断念させたのではなく、つぎの復活祭まで延期を決めたのである、とする。

論文としては、仮定として a. オリユンピカ b. 数学の論文 c. 良識の研究が考えられるとする。a. の「オリユンピカ」については、一冊の著書の端緒を構成するにはあまりに断片的過ぎる。b. の数学上の論文としては、グーイエと同じく、「数学の宝庫」を上げる。c. として、一般的な方法論上の考察がこの時期に展開されていたこともあり得る、としてバイエには知られ、その後紛失した「良識の研究」を上げる。

9. 巡礼は実際に行われたか

一六二〇年、まだ冬も明けきれないうちに旅に出たデカルトは、ウルムに行き、そこからこの年の春あるいは秋に、プラハ周辺で足を留めることになったといわれる。しかし確実なのは、一六二二年にフランスに帰国したということのみである。しかしデカルトは、一六二〇年九月に南ドイツからストラスブル経由でまっすぐフランスに帰ったと言う憶測も立てられている。そして、一六二〇年の秋にはパリにいたという可能性も否定出来ないと言われている。

ロレットへの巡礼については、バイエによると「イタリアへの旅は異なるものとならざるを得なかった」と延期されたことになっており、レーヴィスも「二〇年の春」「この時期執筆の論文を終えるという固い決心と一緒に書き残されていたロレットへの巡礼を実現しなかった」としている。以上のことを考えると、二〇年にはロレットへの巡礼は行われなかったと考えられる。

デカルトは、少し後にイタリアに旅をしたといわれる。バイエの語るところによると、一六二三年

九月にスイスに入って、バーゼルからインスブルック、そしてブレンナー峠からイタリアのヴェネツィアへ、ついで念願のロレット詣でを果たし、同年末にはローマに到着し、聖年の大祭にも列したとされるが、確かなことは分らない。

イタリアへの旅行では、この国の暑気を厭う思いの再度の手紙（一六三二、五、五 バルザック宛、一六三九、十一、十三 メルセンヌ宛）を除けばデカルトの語ることは皆無に等しい。しかし、フランスへの帰途がスーサからモンズニ峠越えであったことはほぼ確実に（メルセンヌ宛一六三九、十二、二十五）、それは一六二五年五月のことと思われる。

このように、デカルトは一六二〇年にはロレットへの巡礼は行わなかったが、一六二三年から一六二五年のイタリア旅行においてもロレットへの巡礼を行ったかどうかは確実ではない。

主要参考文献

- C. Adam & Tannery, *Oeuvres de Descartes Tome X*, 1986, Vrin
Descartes, *Oeuvres philosophiques Tome I* édition de F. Alquié, 1979, Garnier
H. Gouhier, *Les premières pensées de Descartes*, 1979, Vrin
デカルト「方法序説」 落合太郎訳註 一九八七年 岩波書店
所 雄章著「デカルト」一九八一年 講談社
所 雄章著「デカルト」I 一九六七年 勁草書房
ロデイス・レーヴィス著 小林道夫・川添信介訳「デカルトの著作と体系」一九九〇年 紀伊国屋書店
田中仁彦著「デカルトの旅、デカルトの夢」一九八九年 岩波書店
森 有正著「デカルトとパスカル」一九八〇年 筑摩書房